様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：４５３０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０３７２

研究課題名（和文）感謝表出の対人機能―直接的・間接的互恵関係の成立における役割―

研究課題名（英文）The social functions of expressions of feeling of gratitude: Their role in direct and indirect reciprocity.

研究代表者
蔵永　瞳（Kuranaga, Hitomi）

就実短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：３０６３４５８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、感謝表出の社会的機能について検討することであった。感謝表出についての調査の結果、様々な感謝表出のうち、笑顔やお礼を言うといった形態の行動が、受け手の「感謝された」という認識を引き出すことが示された。また、感謝表出の有無を操作した実験室実験では、他者から支援されたとき感謝表出を受けると、受け手は表出者に対して好感を抱くことが示された。さらに、感謝表出の有無だけでなく、そこに感謝の気持ちが伴っていたかについても操作したシナリオ実験では、受け手が「感謝された」という認識をしていたとしても、被支援者が感謝の気持ちを表出しなければ、その後支援してもらいにくくなることが示された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine the social functions of expressions of feeling of gratitude. The research results show that two types of expressions -smiling and saying “thank you”- make the aid-provider recognize the aid-receiver felt gratitude. In addition, experiments manipulating the aid-receiver’s response show that the aid-provider holds positive feelings toward people who express gratitude. Furthermore, the results of experiments using various scenarios suggest that even if the aid-provider recognizes that the aid-receiver felt gratitude, if the aid-receiver does not express gratitude, he/she will have difficulty receiving further help.

研究分野：社会心理学

キーワード：感情表出　社会的感情　ポジティブ感情　ポジティブ心理学

１．研究開始当初の背景

人間が健康で幸福な社会生活を送るためには、他者から支援され、自分も他者を支援する互恵的関係を結ぶことが重要である（たとえばTrivers, 1971; Rook, 1987）。この互恵的関係を結ぶ要素の一つとして、「感謝」がある（Nowak, 2007）。

申請者はこれまで、感謝の感情（支援を受けた当人の中で経験されるありがたい気持ち）についての研究を実施してきたが、感謝がどのようにして互恵的関係の成立に貢献しているのか検討する上では、感謝の表出（他者に対してありがたい気持ちを表出する行動）についても検討する必要があると考えた。なぜならば、感謝の感情と感謝の表出とでは、社会的に機能する範囲が異なると考えられるためである。まず、感謝感情に関しては、個人内での主観的な経験であるため、影響を及ぼす範囲は感謝を感じた当人までであり、周囲の他者までには及ばない（たとえば、どんなに強い感謝感情を経験しても、それを何らかの行動として表出しなければ、他者に影響を及ぼすことはないだろう）。これに対して感謝表出（他者に対してありがたい気持ちを表出する行動）は、他者にむけた行動であるため、他者にまで影響が及ぶと考えられる。

２．研究の目的

本研究では、感謝表出の社会的機能を明らかにするため、感謝の表出を受けた際、表出の受け手（支援者）はどのような認知、感情を経験するのか、感謝表出を受けることが表出の受け手（支援者）のその後の行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

３．研究の方法

（1）研究 1：被支援者の感謝表出の形態と、支援者（被表出者）の心理状態やその後の行動との関連について検討

30 名の大学生及び大学院生（男性 11 名、女性 19 名)を対象とした調査を行った。調査は、これまでに他者を支援して感謝されたときのことを思い出してもらい、その場面の詳細について尋ねるものであった。調査では、以下の 3 点を尋ねた。①支援を受けたときの被支援者の反応（笑顔をうかべる、お礼を言う、おじぎをする、支援者を褒める等)、②その反応を受けたときの支援者（被表出者。調査対象者）の心理状態（感情状態、自分が行った支援に対する評価、被支援者のパーソナリティについての評価等)、③支援者（被表出者）のその後の行動（もし今後、同じような場面に遭遇したら、またこの人を助けるか等)。測定した概念のイメージを図 1 に示す。

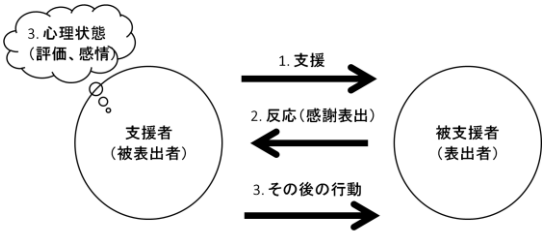

図 1　研究 1 で調査した内容

（2）研究 2：様々ある感謝表出の形態の中でも、どのような形態が感謝の気持ちを相手に伝達しやすいのかについて検討

研究 1 では、感謝表出を受けたときの心理状態として様々な状態を仮定したが、感謝表出を受けた際の心理状態として最も重要である、「どの程度被支援者が感謝していると感じたか」について測定をしていなかった。そのため、研究 2 では、様々ある感謝表出の形態の中でも、どのような形態が感謝の気持ちを相手に伝達しやすいのかについて検討を行った。

具体的には、大学生 229 名（男性 138 名、女性 91 名）を対象とした調査を行った。調査は、これまでに他者（友人、見知らぬ人のいずれか）を支援して感謝されたときのことを思い出してもらい、その場面の詳細について尋ねるものであった。感謝表出者（被支援者）として友人と見知らぬ人の 2 種類を設定したのは、支援者と被支援者との関係性によって、表出形態が表す意味が異なる可能性を考慮したためであった。調査では、以下の 2 点を尋ねた。①支援を受けたときの被支援者（友人、見知らぬ人いずれか）の反応（笑顔をうかべる、お礼を言う、おじぎをする、支援者を褒める等)、②その反応を受けた際、どの程度支援者（調査対象者）が「この人は自分に対して感謝している」と感じたか。

（3）研究 3：感謝表出の有無によって被表出者の心理状態、その後の行動が異なるかについて因果関係を検討

研究 1、2 は、感謝表出についてのこれまでの体験を尋ねる調査であったが、感謝表出が被表出者の心理状態やその後の行動に及ぼす影響について因果関係を特定するためには、感謝表出の有無を操作する実験を行う必要がある。そこで本研究では、大学生 37 名（男性 13 名、女性 24 名）を対象とする実験室実験を行った。なお、本実験における感謝表出の操作は、実験協力者（実験において、被支援者の役割を担う）の反応内容を変えることで行った。実験協力者は、大学生 4 名（男性 2 名、女性 2 名）であった。

実験計画は、感謝表出あり条件（実験条件; n = 12)，会話のみ条件（統制条件 a; n =11)、無反応条件（統制条件 b; n =14）の一要因三水準実験者間計画であった。実験では、まず、

実験室に参加者と協力者がそろった後、実験者が実験器具の一部を忘れてしまい、器具を取りに行くという名目で実験室を一時退出した。その際、実験者は、協力者に、実験器具の豆を容器に入れておいてほしいとお願いした。実験者が実験室から退出した後、協力者は豆を器に入れようとするが、失敗してしまい、豆が机や床にこぼれてしまう。その際、参加者からの支援（落ちた豆を拾ってくれた）への協力者の反応として、3 つの反応を設定した。具体的には、①感謝表出あり（協力者の方を見て笑顔でありがとうございますと言う）、②会話のみ（たくさんこぼれちゃいましたねと言う）、③無反応（何も反応しない）の 3 条件を設定した。実験者が実験室に戻った後、現在の心理状態や、実験協力者の印象等について質問紙に回答してもらった。また、その後、PC 上で協力者との信頼ゲームを行ってもらったほか（相手にどの程度投資するかを測定することで、支援行動を測定）、他の実験への参加依頼を行った（自由参加の実験への協力の有無や協力時間を測定することで、第三者への支援を測定）。

（4）研究 4：感謝の「素振り」と「気持ち」が支援者のその後の行動に及ぼす影響

研究 3 では、感謝表出の有無を操作する実験室実験を行ったが、その際には、実験参加者に実験の目的を気付かれないよう、実験協力者（被支援者）がどの程度感謝を感じていたかについては尋ねなかった。そのため、感謝表出の効果が感謝の素振り（笑顔、お礼を言うといった、感謝を示す行動の認識）によるものなのか、感謝の気持ち（被支援者が感謝しているという認識）によるものなのかを特定することができなかった。感謝表出の社会的機能について検討する上では、この点について特定する必要があろう。そこで、研究 4 では、感謝の素振りと気持ちを独立に操作するシナリオ実験を行い、それぞれの効果と組み合わせによる効果について検討を行った。

実験は、感謝の「素振り」と「気持ち」について、それぞれの有無を操作した 4 条件に統制条件を加えた、計 5 条件の実験参加者間計画であった。実験参加者の募集、シナリオの呈示・質問項目への回答は全てクラウドソーシングを用いて行った。シナリオ呈示と測定に順番と内容は以下の通りであった。①支援場面の呈示：英会話のグループレッスンに通うことになり、レッスン初日の往路で見知らぬ人の財布を拾って持ち主に届けたという内容を呈示した（落とし主は参加者と同性・同年代とした）。②感謝の素振り・気持ちの有無の操作：財布を届けたときの落とし主の反応に関して、感謝の素振りと気持ちの有無を操作した（たとえば感謝の素振り無・気持ち有条件では、被支援者について、感謝を感じているものの、それを表には出さなかったようだという説明を記した）。③心理状態の測定：支援場面における感情状態や、被支援者の印象について尋ねた。④支援場面の呈示とその後の支援行動の測定：先ほどの財布の落とし主が英会話教室の同じクラスにおり、レッスン後、その人物が英会話のテキストを教室に忘れて行ったという内容を呈示した。その上で、忘れ物を届けるためにその人物を追いかけるか尋ねた。なお、④については、感謝表出者に対する支援行動のほかに、第三者への支援行動（英会話教室からの帰り道で、再び見知らぬ人が財布を落としたところに遭遇した際、落とし主に財布を届けるかを尋ねた）や、親和行動（先ほどの財布の落とし主と英会話のクラスで演習の際にペアを組むかを尋ねた）についても測定した。支援行動だけでなく、親和行動についても測定を行ったのは、研究 3 で、感謝表出の有無によって対人印象（好感）が変わるということが示されたため、それが親和行動につながることを予想したためであった。

統制条件の実験参加者には、上記の④、①、③という順序でシナリオの呈示と測定を行った。

４．研究成果

（1）研究 1：被支援者の感謝表出の形態と、支援者（被表出者）の心理状態やその後の行動との関連について検討

取得したデータについて、被支援者の反応（笑顔をうかべる、お礼を言う、おじぎをする、支援者を褒める等）と、その反応を受けたときの支援者の心理状態、その後の行動意思について相関係数を算出した（表 1）。

表 1　感謝表出の形態と被表出者の反応

	Gratitude expression(The recipient's behavior)					
	Smiling	Saying "thank you"	Expressing gratitude with gesture	Saying "sorry"	Bowing to the benefactor	Saying "Great!" or "Good!"
Response: Benefactor's cognition						
I think the person has a good personality.	.55 **	.30	.10	.02	-.02	.31 +
I think that I am valuable to others.	.22	.06	.18	-.10	-.17	.50 **
I think that I did a good thing.	.57 **	.36 +	-.05	-.09	.11	.44 *
I want the person forget it.	-.20	.02	-.27	.13	.30	-.16
Response: Benefactor's emotion						
I feel happy.	.40 *	.19	-.06	-.07	-.05	.36 +
Response: Benefactor's behavior						
If I encounter a similar situation, I will do a kindness for this person.	.29	.58 **	.10	.01	-.10	.08
I will do anything for this person.	-.09	.22	.35 +	.08	-.28	.34 +
I will be nice to this person.	-.24	.35 +	.06	.28	-.13	.15
I will bond with this person.	.07	.18	.18	.16	-.13	.24
If there is anything I can do, I will help others.	.36 +	.26	-.02	-.18	.29	.14
I will do this type of kindness for aother person.	.40 *	.29	.05	-.11	-.03	.24
I will deal with many people.	.04	.28	.02	-.06	.16	.13

** $p < .001$, * $p < .05$

その結果、被支援者が「ありがとう」等とお礼を言うことは、その後、同様の場面・同一の支援対象に対する支援行動と正の関連があることが示された（r=.58, p<.001）。さらに、支援者の反応の中でも、笑顔は、被表出者のポジティブ感情や（r=.40, p<.05）、笑顔をうかべた人のことを「良い人だ」等と肯定的に評価すること（r=.55, p<.001）と正の関連があることや、その後の第三者に対する支援行動とも正の関連があること（r=.40, p<.05）が示された。

これらの結果は、様々な感謝表出の形態の中でも、「ありがとう」等とお礼を言うことや、笑顔をうかべることは、被表出者（支援者）による支援行動を促す効果があることを示唆している。

（2）研究 2：様々ある感謝表出の形態の中でも、どのような形態が感謝の気持ちを相手に伝達しやすいのかについて検討

取得したデータについて共分散構造分析を行った結果（図 2）、様々な感謝表出形態のうち、笑顔（β=.29, p<.001）、相手を褒める行動（β=.23, p<.001）、お礼を言う行動（β=.19, p<.05）は、表出者（被支援者）が友人である場合に、「感謝された」という認識を促すことが示された。一方、表出者（被支援者）が見知らぬ人である場合は、笑顔（β=.28, p<.05）とお礼を言う行動（β=.26, p<.05）が「感謝された」という認識を促すことが示された。これらのことから、支援者に対して被支援者が笑顔を浮かべたり、お礼を言ったりすることは、支援者と被支援者との関係性に関わらず、感謝の気持ちを伝達しやすいと考えられる。

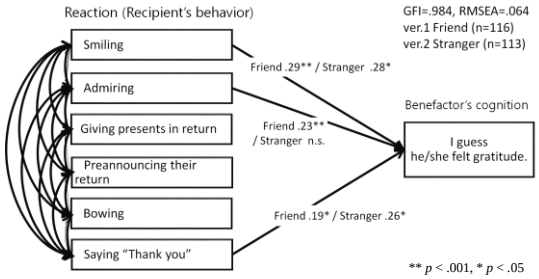

図 2　感謝表出の形態と感謝されたという認知の関係

（3）研究 3：感謝表出の有無によって被表出者の心理状態、その後の行動が異なるかについて因果関係を検討

実験で得られたデータに関して分析を行った結果、心理状態や対人印象、その後の支援行動等の様々な従属変数の中でも、対人印象（好感）について、感謝表出の有無による有意な差がみられた。具体的には、感謝表出について操作を行った実験条件（感謝表出あり条件、会話のみ条件、無反応条件）を独立変数、対人印象（好感）を従属変数とする一要因三水準の分散分析を行った結果、主効果が有意となったため（F = 4.120; p < .05）、Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、感謝表出あり条件における対人印象（好感）が無反応条件よりも有意に高いことが示された（図 3）。この実験結果は、他者から支援を受けたとき、支援に対して感謝表出をすることで、支援者から好感を抱かれるという因果関係を示唆するものであった。

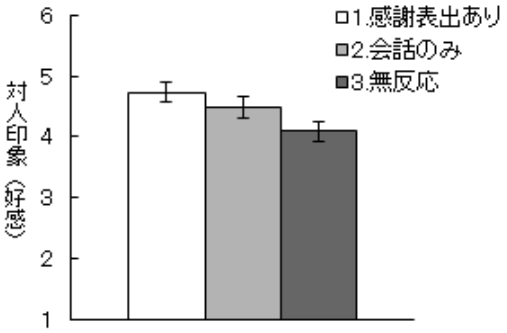

図 3　感謝表出の有無による対人印象（好感）の違い

（4）研究 4：感謝の「素振り」と「気持ち」が支援者のその後の行動に及ぼす影響

実験で得られたデータに関して分析を行った結果、親和行動とその後の支援行動について、条件間で有意な差が認められた。

まず、親和行動に関しては、支援者・被支援者の性別と実験条件（統制条件を含む 5 条件）を独立変数、親和行動の得点を従属変数とする分散分析を行った。実験条件による主効果が有意であったため（F(4, 351) = 24.86, p<.001）、多重比較を行ったところ、図 4 に示す結果となった。この結果から、支援者・被支援者の性別によらず、感謝の素振り・気持ちの両方がなかったり、感謝の気持ちか素振りのどちらかがなかったりすると、その後の親和行動が抑制される可能性が示された。

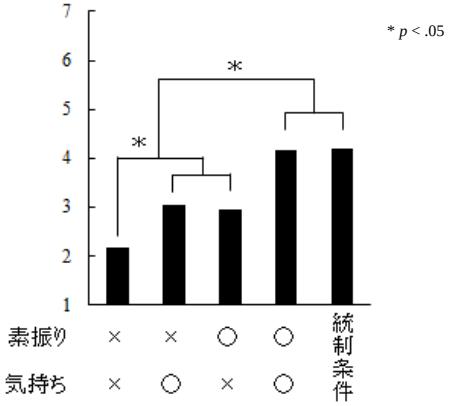

図 4 感謝の素振りと気持ちの有無による親和行動の違い

つぎに、支援行動に関しては、同様の分散分析を行ったところ、性別×実験条件の交互作用が有意であったため（F = 2.49, p = .043）、性別を固定した実験条件の単純主効果及び

多重比較の結果を検討した。その結果を図 5 に示す。

この結果から、支援者・被支援者の性別によらず、感謝の素振り・気持ち双方がないとその後の支援行動が抑制されることや、感謝の気持ちはあっても素振りがなければ、双方がある場合と比べるとその後同じ相手から支援してもらいにくくなることが示された。

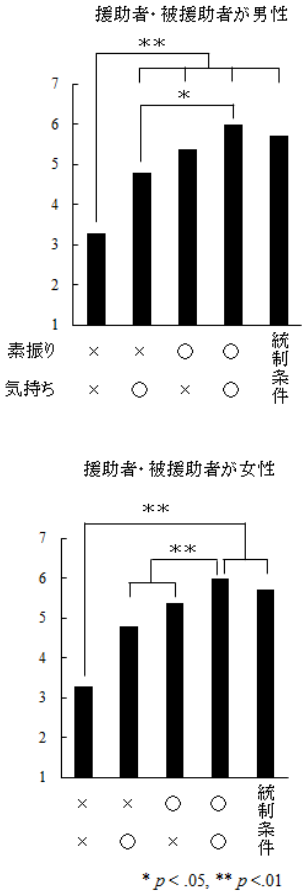

図 5 感謝の素振りと気持ちの有無による支援行動の違い

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①蔵永　瞳 (2016). 感謝の気持ちの育て方―大学生を対象とした回顧法による検討―就実論叢, 第 45 号, 91-98.査読なし
http://repository.shujitsu.ac.jp/metadata/190

〔学会発表〕（計 7 件）

①蔵永　瞳、感謝，尊敬，コンパッションの感情科学、日本心理学会第 79 回大会（企画・話題提供：有光興記、　話題提供：蔵永　瞳、武藤世良、　指定討論：中村　真）、2015 年 9 月 22 日発表、於：名古屋国際会議場　(愛知県 名古屋市)

②蔵永　瞳・樋口匡貴・福田哲也、感謝表出が表出者の印象に及ぼす影響―被表出者は表出者のことをどう思うのか―、日本感情心理学会第 23 回大会、2015 年 6 月 13 日発表、於：新渡戸文化短期大学（東京都中野区）

③Kuranaga, H., Higuchi, M., & Fukuda, T.、The cognition of receiving gratitude: The effect of other's behaviors on cognition. 、 2015 The Society for Personality and Social Psychology 16th Annual Convention、2015 年 2 月 28 日発表、於：Long Beach　(United States of America)

④蔵永　瞳、感謝の教わり方－大学生を対象とした回顧法による検討－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 8 日発表、於：神戸国際会議場（兵庫県 神戸市）

⑤蔵永　瞳・樋口匡貴・福田哲也、感謝の対人機能（2）：感謝の表出形態によって受け手の認知・感情は異なるか、日本社会心理学会第 54 回大会、2013 年 11 月 3 日発表、於：沖縄国際大学（沖縄県 宜野湾市）

⑥蔵永　瞳・樋口匡貴・福田哲也、感謝の対人機能に関する検討（1）―感謝される側の認知・感情に着目して―、日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 19 日発表、於：北海道医療大学（北海道 札幌市）

⑦Kuranaga, H., Higuchi, M., & Fukuda, T.、Relationship between type of gratitude expression and recipient's response.、The 13th European Congress of Psychology、2013 年 7 月 11 日発表、於：Stockholm (Sweden)

〔その他〕
ホームページ等
http://www.kuranaga.net/

６．研究組織
(1)研究代表者
蔵永　瞳（Kuranaga Hitomi）
就実短期大学・幼児教育学科・講師
研究者番号：30634589